

◆【海員随想】二つの救命胴衣③ 石橋 正

急速な低気圧――ワイヤー2本が切断、船は糸の無い凧のようであった。険しい崖に叩き付けられれば万が一にも助からない。「エンジンよ、早くかかってくれ」と祈る。奇跡的に1回で回り出してくれた幸運……

やがて夜が明けたが、烈風で目も開けられず、海面はさらに真っ白に沸き立っていた。船は真っ直ぐに南東を向いて走っていたが、この方角はどこまで行っても海である。しかし釧路に逃げ込むためにコースを変えると、巨大な横波を受けながら走らねばならず、逆に襟裳岬の暗礁をかわして西へ航走することは自殺行為であった。

どうしようもなかった。ただ風と波に立てる以外に安全を守る方法はなかった。しかし、いま出会っている低気圧の中心が通り過ぎると必ず風が変わる。そして、この大きなうねりと違った方向から強風が吹きまくることになり、その真っ只中に追い込まれることは、絶壁に叩きつけられる以上の最悪の事態を意味する。

私はできるだけ陸地から離れないように機関を調節していた。何百回と前進・停止を繰り返したためと激しい震動のせいか、機関室から白煙が上がり始めた。明らかにエンジンに無理がきているのだ。

――もし、ここでエンジンが止まってしまったら終わりだ、と不吉な予感を覚えたが、それは十分に起こり得る危険な事実であった。

小さな真白い船が激しい時化の海の中を、港外で行きつ戻りつしているのを、広尾港の人たちは崖の上から黒山のようになって見ていたということである。若い灯台長は、何度か港への急な坂を駆け下りて、私たちの様子を見守ってくれていたそうだが、転覆すること間違いなしと思っていたという。見物人の中には、私が大波の中で無謀な反転動作を行ない、潮けむりで船が見えなくなったとき、思わず顔をおおった若い女性もあったという。

正味12時間、私はこの低気圧の猛威と闘ったが、その移動速度の遅いことから、この闘いは夜まで続くことが予想された。デッキ上に置いた物、十分に固縛していなかった物はすべて吹き飛ばされ流出していた。そして、もちろん炊飯などできるはずもなく、乗組員たちは疲れ果て空腹であった。

――こんなとき船長は一体どうすればいいのだ……。揺れるブリッジの壁に寄りかかって腕組みをしてみたが、経験の少ない私には、すでに適切な判断をする余力が残っていなかっただろうと思う。